

龍 蔵 寺 縁 起

- 1 山 号 太平山 (多紀三山の一)
- 2 所在地 兵庫県篠山市真南条上一四七四
- 3 宗 派 天台宗 (旧丹波国中本山の一)

当寺は人皇三十六代孝徳天皇の大化元年、(西紀645) 印度から本邦に來遊し諸山を開かれた、法道仙人に依って開創されたのである。

仙人が山中の飛瀑(忍滴)で修行せられていた時に、俱哩伽羅、大竜王が顕現し、竜珠を示して、〔此は是れ仏法弘通の重宝、万民快樂の妙珍なり、此山に永く蔵して鎮護國家の靈場とせよ〕と言って姿を消した。そこで龍蔵寺の寺名が出たと縁起には記されている。因に多紀郷土史話(福原会下山人)には、太古多紀郡一円が沼地であって其処に龍が住んでいた。それを諏訪の明神(建御名方命)が郷土を開拓せられた時、大竜を退治せられ、その大竜が十一面觀世音の姿を現し、南方の高山に蔵れたのでそこに、龍蔵寺を建てたとあり、〔又竜神は多紀三山たる竜蔵寺に永劫に功德を垂れたとしてある。〕

此の寺の山号を太平山と言うのは、古佐の諏訪の本の西を太平(オオビラ)と言うのであるから、此の地名を永久に保存せられたのであると記されていて、山頂が鋭くトガッているのは竜の頭であるとの伝説が今尚俗信仰として語られている事は、此の寺が多紀郡の開発と共に一番古くから民衆に親しまれ、神聖な靈山として民間信仰を集めていた事が立証されるのである。

当山の縁起に依れば、太平山の山号は三十八代天智天皇の勅を奉じ天下泰平を御祈禱した功に依り下賜せられたと記されている。

ともあれ、当山は仏法の日本伝来以前から人々が入里を離れた靈地に修業の場を見つけんと屢々入山していたものの様である。だから修験道の行場として繁栄し、全盛期には寺坊七十二字を有した。

降って、平安朝に伝教大師入唐求法せられ、爾来天台の宗風を伝え、觀音信仰の靈地として果た又、丹波地区に於ける僧侶養成の道場として盛えたのである。ところが人皇八十一代安徳天皇の壽永二年二月上旬、兵火に罹り灰滅に歸したが后鳥羽帝の文治五年一乗上人が中興再建せられ、堂宇三十六を有した。此の時本堂(山上に立派な石垣現存す)には叡山の根本中堂に倣って薬師如来を本尊として勧請した様である。

下って百四代后柏原帝の文龜三年正月二十四日、山中の天狗岩上に勝軍地藏愛宕大権現が示現せられ、〔此処に降臨して万民を擁護す、即ち社殿を造り吾像を祭るべしと、之に依って尊像を彫刻し社殿を建立したのが現在の愛宕尊堂である。〕

爾来防火の靈験著しく京都の愛宕尊と同躰として、播丹一円より盛んな信仰を集めていた様である。それは現存せる二百二十三段の石段に往時の盛事が偲ばれるのである。

百五代后奈良帝の天文年中花王院玄真大僧正叙山より來寺せられ、当寺を再興せられたるも、弘治二年十月三好長慶の徒、八上城を落さんと丹波屋上に出陣竜蔵寺を賁落したと記

されている。(日本国法資料叢書)

更に百七代后陽成帝の慶長年中に御嶽山の長老頼慶が、三世三千仏(三軸)並に蔵王尊(現在篠山町池上氏神に所蔵)を護持して当山に移住し、寄進せられたものが現に保存せられている。(多紀郡名宝指定)此の時護持せられた蔵王尊は当山頂に安置され(旧跡存す)代々の城主の信仰厚く、藩内干魃の時には、雨請を下命せられていた事は、古文書に依って明らかである。此の蔵王尊が当山に鎮座せられていた間は(嬢)が山中に一匹も居なかったが、約百年前に池上の大日寺(当山の末寺今の氏神)に移されてから池上地区はやはり嬢が居ない様である。これは不思議な靈験の一つである。

続いて元龜の兵乱に依って天台宗の総本山延暦寺が灰燼に歸した為に全国の末寺は日々衰微し、他宗に転派して行つた模様で、郡内でも同じく多数の天台宗寺院が此の時禅宗や浄土宗に転じているのである。然るに当寺は依然として天台の宗風を護持し、房舎二十有余を有していたので、叡山再興の砌に丹波国の四ヶ中本山に列せられた様である。

又豊臣大関天下統一の時には、御朱印を賜わり、徳川二代將軍からは元和五年全山(百町歩)を知行として寄附せられ、篠山城主松平、青山兩藩主は代々尊崇の念厚く、特に松平紀伊守教房郷は十六善神や長刀、鎧等を当山に寄進せられているのである。(現存)

一方天台宗教界にあっても当山から多数立派な僧侶が輩出し、叡山との間に盛んに交流が行われた様である。中でも探題普寂妙光大僧正(西紀町小坂出身)等は有名である。

爾来一山二十有余坊も漸次衰微の兆が表われ、天保年中の記録には、十余の諸堂宇と三ヶ寺院が現存するだけであり、明治二年の記録には、本堂、觀音堂、地藏堂、阿彌陀堂、愛宕堂、山王権現社、蔵王堂、鐘樓二字、宝蔵、護法神社、自性院、常照院の建物が現存しているが、明治四年に当山の唯一の財源たる山林(百町歩)は総て上地林となった為め、檀徒の無い修行の道場は茲に維持困難をきたし自然の荒廢にまかすと共に十八箇末寺は殆んど神社に更改せられて行つたのである。明治八年の地租改正の時、当山の境内六十三町歩は殆んど国有地に編入せられてしまったのである。こうして荒廢極に達していた時、大正七年上地林が寺の保管林となり、制度が改められた為め、稍復興の端緒が開かれ、先住宝山和尚は大正十年より入山工事を起し今日の基礎を築かれたのであるが、戦後再び山林は国有林となり、未だ本堂等の再建を見ずに今日に至っている現状であります。

然れども貴重な宝物や、古文書も多数保存せられている事は実に有難い事である。現住泰山和尚は戦後の荒廢の中より立ち上り、山林の植林に莫大な労資を投じ、伽藍の修復や境内の整備に努めると共に、

昭和四十二年には〔子育て地藏尊(銅像)〕を建立して生命の尊厳性を強く訴えれば最近は近畿一円より若い婦人層の参拝者が跡を絶たないのである。

又昭和四十三年には〔一隅を照らす〕人材の育成にと宗祖大師の祖訓を載し新たに信行道場を建設して、各種の錬成行事や青少年学徒の仏心の開発に精魂を傾けているのである。今後は残された四季景勝の境内を利用して、青少年の社会福祉に開放し、身心の浄化を図ると共に、千三百三十年の伝灯を持つ当山の清浄な靈域に正しい信火を燃やし続けて行かねばならないのである。

既に境内に京大の地震観測室も新設されているので徐々に開発されて行くであろう。郷土の古刹を何とか今後護持して行く事は、郷土民のつとめでなければならぬ。(未完)